

『資本論』 第1部 資本の生産過程

<要約:紅林進>

第2篇 貨幣の資本への転化

第4章 貨幣の資本への転化

第1節 資本の一般定式

商品流通は資本の出発点である。商品生産と、発達した商品流通すなわち商業とは、資本が成立するための歴史的前提をなしている。世界貿易と世界市場とは、16世紀に資本の近代的生活史を開くのである。

商品流通の最後の産物、貨幣は、資本の最初の現象形態である。

歴史的には、資本は、土地所有にたいして、どこでも最初はず貨幣の形で、貨幣財産として、商人資本および高利資本として相対する。

貨幣のための貨幣と資本としての貨幣とは、さしあたりはただ両者の流通形態の相違によって区別されるだけである。

W—G—W 商品の貨幣への転化と貨幣の商品への再転化 買うために売る
G—W—G 貨幣の商品への転化と商品お貨幣への再転化、 売るために買う

後者の貨幣は資本に転化する。

G—W—G の第一の段階、G—W、 買いでは、貨幣が商品に転化される。
第二の段階、W—G、 売りでは、商品が貨幣に再転化される。
しかし二つの段階の統一は、売るために商品を買うという総運動である。
貨幣で商品を買ひ、商品で貨幣を買うという総運動である。
その結果は、貨幣と貨幣の交換、G—G である。

同じ貨幣価値を同じ貨幣価値と、たとえば100ポンド・スターリングを100ポンド・スターリングと交換しようとするならば、流通過程 G—W—G はつまらない、無内容なものになる。(量的に違ってこそ意味を持つ。)貨幣は還流することになる。

循環 W—G—W は、あるひとつの極から出発して別の商品の極で終結し、この商品は流通から出て消費されてしまう。それゆえ、使用価値がこの循環の最終目的である。これに反して、循環 G—W—G は、貨幣の極から出発して、最後に同じ貨幣に帰ってくる。それゆえ、この循環の起動的動機も規定的目的も交換価値そのものである。

過程 G—W—G は、その両極がどちらも貨幣なのだから両極の質的な相違によって内容を持つのではなく、ただ両極の量的な相違によってのみ内容を持つのである。最後には、最初に流通に投げ込まれたよりも多くの貨幣が流通から引き上げられるのである。

それゆえ、この過程の完全な形態は、G—W—G' であって、G' = G + ΔG である。すなわち G' は、最初に前貸しされて貨幣額・プラス・ある増加分に等しい。

この増加分、または最初の価値を越える超過分を、私は剰余価値(surplus value)と呼ぶ。それゆえ、最初に前貸しされた価値は、流通の中で自分の価値量を変え、剰余価値を付け加えるのであり、言い換えれば自分を価値増殖するのである。そして、この運動がこの価値を資本に転化させるのである。

単純な商品流通、買いのための売りは、流通の外にある最終目的、使用価値の取得、欲望の充足のための手段として役立つ。

これに反して、資本としての貨幣の流通は自己目的である。というのは価値増殖は、ただこの絶えず更新される運動のなかだけに存在するのだからである。それだから、資本の運動には限界がないのである。

この運動の意識ある担い手として、貨幣所持者は資本家になる。

使用価値ははけっして資本家の直接的目的として取り扱われるべきものではない。個々の利得もまたそうではなく、ただ利得することの無休の運動だけがそうなのである。この絶対的な致富衝動、この熱情的な価値追求は、資本家にも貨幣蓄蔵者にも共通であるが、しかし、貨幣蓄蔵者は気の違った資本家でしかないのに、資本家は合理的な資本蓄蔵者なのである。価値の無休の増殖、これを貨幣蓄蔵者は、貨幣を流通から救い出そうとすることによって、追求するのであるが、もっと利口な資本家は、貨幣を絶えず繰り返し流通に投げ込むことによって、それをなしとげるのである。

商人資本、 $G-W-G'$

利子生み資本、 $G-G'$

資本の一般的定式、 $G-W-G'$

第2節 一般定式の矛盾

貨幣が繭を破って資本に成長する場合の流通形態は、商品や価値や貨幣や流通そのものの性質についての以前に展開されたすべての法則に矛盾している。

この流通形態を単純な流通形態から区別するものは、同じ二つの反対の過程である売りと買いの順序が逆になっていることである。

使用価値については、「両方が得をする取引である」ともいえるのである。交換価値のほうはそうではない。

単純な商品流通のなかで行われるのは、商品の変態、単なる形態変換のほかには何も無い。同じ価値が、すなわち同じ量の対象化された社会的労働が、同じ商品所持者の手のなかに、最初は彼の商品の姿で、次にはこの商品が転化する貨幣の姿で、最後にはこの貨幣が再転化する商品の姿で、とどまっている。この形態変換は少しも価値量の変化を含んではいない。

その純粋な姿では、商品交換は等価物どうしの交換であり、したがって、価値を増やす手段ではないのである。

商品流通を剰余価値の源泉として説明しようとする試みの背後には、たいていは一つの取り違えが、つまり使用価値と交換価値との混同が、隠れているのである。

等価物どうしが交換されるとすれば剰余価値は生まれず、非等価物どうしが交換されるとしてもやはり剰余価値は生まれず。流通または商品交換は価値を創造しないのである。

資本の基本形態、すなわち近代社会の経済組織を規定するものとしての資本の形態をわれわれが分析するにあたって、なぜ資本の普通に知られているいわば大洪水以前の姿である商業資本と高利資本とをさしあたりはまったく考慮に入れないでいいのか、がわかるであろう。

貨幣の資本への転化、剰余価値の形成を流通そのものから説明することは不可能なのだから、商業資本は、等価物どうしが交換されるようになれば、不可能なものとして現れ、したがって、ただ、買う商品生産者と売る商品生産者との間に寄生的に割り込む商人によってこれらの生産者が両方ともだまし取られるということからのみ導き出されるものとして現れる。この意味で、フランクリンは、「戦争は略奪であり、商業は詐取である」というのである。

剰余価値は流通から発生することはできないのだから、それが形成されるときには、流通そのもののなかでは目に見えないなにごとかが流通の背後で起きるのでなければならない。

資本は流通から発生することはできないし、また流通から発生しないわけにも行かないのである。資本は流通のなかで発生しなければならないと同時に流通のなかで発生してはならないのである。

第3節 労働力の売買

資本に転化すべき資本の価値変化、価値増殖は、貨幣そのものからも、流通行為、商品の再販売からも生じない。それは価値(創造)の源泉であるという独特の使用価値を持っている労働力商品の購入による労働力の使用・消費によってである。

労働力または労働能力というのは、人間の肉体すなわち生きている人格のうちに存在していて、彼が何らかの種類の使用価値を生産するときとそのつど運動させるところの、肉体および精神的諸能力の総体のことである。

労働力の所持者が労働力を売るためには、彼は労働力を自由に処分できなければならない、したがって彼の労働能力、彼の一身の自由な所有者でなければならない。労働力の所持者と貨幣の所持者とは、市場で出会って対等な商品所持者として関係を結ぶのであり、両方とも法律上は平等な人である。

貨幣所持者が労働力を市場で商品として見出すための第二の本質的条件は、労働力所持者が自分の労働の対象化されている商品を持つことができないで、ただ自分の生きている肉体のうちにだけ存在する自分の労働力そのものを商品として売り出さなければならないということである。

貨幣が資本に転化するためには、貨幣所持者は商品市場で自由な労働者に出会わなければならない。自由というのは、二重の意味でそうなのであって、自由な人として自分の労働力

を自分の商品として処分できるという意味と、他方では労働力のほかには商品として売るものをもっていなくて、自分の労働力の実現のために必要なすべての物から解放されており、すべてのものから自由であるという意味で、自由なのである。

資本の歴史的な存在条件は、商品・貨幣流通があればそのあるというものでは決してない。資本は、生産手段や生活手段の所持者が市場で自分の労働力の売り手としての自由な労働者に出会うときにはじめて発生するのであり、そして、この一つの歴史的な条件が一つの世界史を包括しているのである。

労働力の価値は、他のどの商品の価値とも同じに、この独自の商品の生産に、したがってまた再生産に必要な労働時間によって規定される。

労働力の生産に必要な労働時間は、その維持に必要な生活手段の生産に必要な労働時間に帰着する。労働力の価値は、労働力の所持者の維持のために必要な生活手段の価値である。

労働力の生産に必要な生活手段の総額は、補充人員すなわち労働者の子供の生活手段を含んでいるのであり、こうしてこの独特な商品所持者の種族が商品市場で永久化されるのである。

一定の労働部門で技能と熟練とを体得して発達した独自の労働力になるようにするための養成費や修業費も、労働力の生産のために支出される価値の中に入る。

資本主義的生産様式が行われる国ではどの国でも、労働力は、売買契約で確定された期間だけ機能してしまっただけである。たとえば各週末に、はじめて支払いを受ける。だから、労働者はどこでも労働力の使用価値を資本家に前貸しするわけである。労働者は、労働力の価格の支払いを受ける前に、労働力を買い手に消費させるのであり、したがって、どこでも労働者が資本家に信用を与えるのである。

労働力の消費過程は同時に商品の生産過程であり、剰余価値の生産過程である。労働力の消費は、他のどの商品の消費とも同じに、市場すなわち流通部面の外で行われる。

労働力の売買が、その限界のなかで行われる流通または商品交換の部面は、じっさい、天賦の人権の本当の楽園だった。ここで支配しているのは、自由、平等、所有、ベンサムである。

この、単純な流通または商品交換の部面を去るにあたって、われわれの登場人物たちの顔つきは、見受けるところ、すでにいくらか変わっている。さっきの貨幣所持者は資本家として先に立ち、労働力所持者は彼の労働者としてあとについて行く。一方は意味ありげにほくそえみながら、せわしげに、他方はおずおずと渋りがちに、まるで自分の皮を売ってしまってもはや革になめされるよりほかになんの望みもない人のように。